

令和6年新春講演会並びに賀詞交歓会

総務委員会

令和6年1月19日（金）、仙台ガーデンパレスにて一般社団法人東北地質調査業協会、一般社団法人斜面防災対策技術協会東北支部、一般社団法人全国さく井協会東北支部の3協会合同による恒例の新春講演会及び賀詞交歓会が開催されました。

新春講演会では、東北地質調査業協会の奥山清春理事長の挨拶の後、現在は福島テレビの天気予報コーナーで気象キャスターを務められ、また、福島テレビ防災ラボ所長、気象防災アドバイザーとしてもご活躍されている斎藤恭紀氏をお迎えし、「東北地方の気象・地震・災害リスクについて～教えて！ 斎藤さん～」と題してご講演を頂きました。



講演される斎藤恭紀氏

最初に「世界で最も雪が降る場所は次の4つの地域のどこでしょうか？」と出題がありました。次の4つの地域とは「1.アラスカ、2.南極、3.シベリア、4.日本」です。会場からは、アラスカ？ シベリア？ 南極はないな…などの声もありましたが、答えは「日本」！ でした。しかも積雪量の世界記録も日本との事。昭和2年に伊吹山（岐阜県）で観測された11.82m！ がその記録だそうです。極寒の地アラスカやシベリアよりも「世界一降雪量が多い」のは、日本でしたが、その大半を担っているのは、やはり「東北地方」です。東北地方の降雪量が多い理由として、日本海には「対馬暖流」という暖かい流れがあり、この暖流から発生する大量の水蒸気がシベリアからの寒気で冷やされ、奥羽山脈とぶつかり日本海側の秋田県、山形県に大雪を降

らせるのだそうです。日本海側に大雪をもたらした雪雲は奥羽山脈を越える際、既に水分を失っているため、乾燥した風が吹くことになり、仙台などの太平洋側の平野部や沿岸地域では、長期間積るような雪は降らないとの事でした。しかし太平洋側の雪は「軽い雪」が多く、さらに風は強いので、「ホワイトアウト」現象が多く見られるのが特徴だそうです。確かに高速道路でホワイトアウトの状況に陥り多重事故が発生する事が多いのは太平洋側だと思いおこしました。東北地域の方々の中には「雪は降らない方が良いな…」と考えている方も多いと思いますが、この雪は、春から夏にかけて雪解け水となり、この豊富な水は田園地帯を潤し、伏流水は世界一美味しい地酒の原料になり、我々の生活を豊かにしてくれる貴重な恵となるのです。しかし、近年では地球温暖化の影響から、山岳部が多い東北地方では豪雨が集中し、自然災害が多発しているのも特徴として挙げられました。

温暖化の影響で夏は猛暑日が続き、昨年の夏は猛暑日の記録も更新されたのは記憶に新しいところです。この猛暑ももはや災害級レベルで、今後、この猛暑がスタンダードになっていくだろうと述べられました。個人レベルでのリスクは自宅で熱中症になり死亡される方々も多いので、今後は自宅の断熱についての対応が重要になると述べられました。

全体レベルでのリスクとしては、温暖化により水蒸気の量が非常に多くなり、線状降水帯の発生が多発し、水害リスクが高まります。特に小さな河川では水位が一気に上昇し、接続する河川でもさばききれなくなるため、内水氾濫し家屋などが浸水してしまうことが多くなるとの事です。これは昨年に福島県いわき・浜通り地方で起こった豪雨災害は正に「線状降水帯」によるもので、小規模河川が氾濫した事例でありました。ハザードマップは大規模河川では作成されており

ましたが、市町村レベルの小規模河川では作成されていないのが実態で、多くの方々が水害リスクを把握していなかったことも明らかになりました。気象予報士の立場からすると「もっと早く避難指示を出せば良かった」と思うそうですが、線状降水帯は発生の予測が難しいのが現状で、今後の課題であるとの事でした。

これらの水害リスクから守る手段としては、ソフト面とハード面の両方を整備する事が重要であると述べられました。ソフト面では先程のハザードマップを充実させ、個人レベルで災害時の避難経路確認や防災グッズや水・食料（1人1週間分は確保）を備蓄しておくなど個人意識を高める事が重要であり、ハード面では堤防強化や遊水地を設けるなどして河川氾濫を防ぐ事が必要であると述べられました。東北地方は水害被害が多く、遊水地事業も令和元年豪雨を受け阿武隈川上流地域において遊水地計画が進んでおり、大変有意義である事も併せて述べられていました。

ちなみに、斎藤氏の令和6年の水害リスク予想は「高い」との事。これは、南米沖の海面水温が高い「エルニーニョ現象」の影響との事。リスクを把握し、一人ひとりが「自分自身の命は自分自身で守る」ことを意識して行動する事の重要性と大切さを、繰り返し語られていました。

東北地方は水害リスクだけでなく地震リスクも高い地域で「地震の巣」とも言われており、地震の回数ランキング1位は福島県で3位は宮城県だそうです。地震はいつ起こると明確に予言ができないのは、周知の事実であり、従って水害リスクへの備えと同じ、「自分自身の命は自分自身で守る」ことが重要との事でした。

最後に「気象キャスターの1日」をご紹介いただきました。以前テレビ朝日で気象予報コーナーを3年間ご担当されていたそうですが、大手テレビ会社では番組に携わる人数は数十人規模だったそうですが、地方局は3人（！）。ですから予報から映像編集まで何でも1人で担当するそうです。

夕方放送ですが、朝9:00には出勤し毎日100枚の天気図を解析し天気予報を伝えるそうです。放送を終えるまでを10と考えると準備が9、放送が1だそうです。その1で失敗してしまうと全てが台

無しになってしまうので「毎日が緊張の連続」と語られました。華やかな業界としましたが、何か私たち地質調査業界と同じ匂いがして、親近感を覚えました。

斎藤氏は知識が豊富で、東北においての自然災害リスクを、時には熱く時にはユーモアも交えながら、大変貴重なご講演を頂きました。

拝聴を終え、地質調査業に身を置く者としては、ハード面での技術協力を通して東北地方の地域貢献、社会貢献ができる業界である事に喜びと誇りを感じ、その事と同時に社会的使命を果たすために、日々の研鑽を怠らず技術の向上をはかり業務に取り組まなければならないと、改めて認識する事ができた大変有意義な講演会でした。

引き続き行われた賀詞交歓会は、コロナ禍により4年振りとなる「人数制限なし」の会となりました。開会に際し、東北地質調査業協会の奥山清春理事長から挨拶をいただき宴席がスタートしました。

久々の再会に互いの近況を確認しあう姿や、地酒の差し入れが宴をさらに盛り上げました。更に講演頂いた、斎藤氏も参加された事もあり、大変盛り上った賀詞交歓会となり、新年の門出を祝いました。



奥山理事長による挨拶

締め括りは、全国さく井協会東北支部の須藤明徳理事より、3協会員及びそのご家族の健康と健勝を祈念した手締めを行い、盛会のうちにお開きとなりました。



盛況の賀詞交歓会